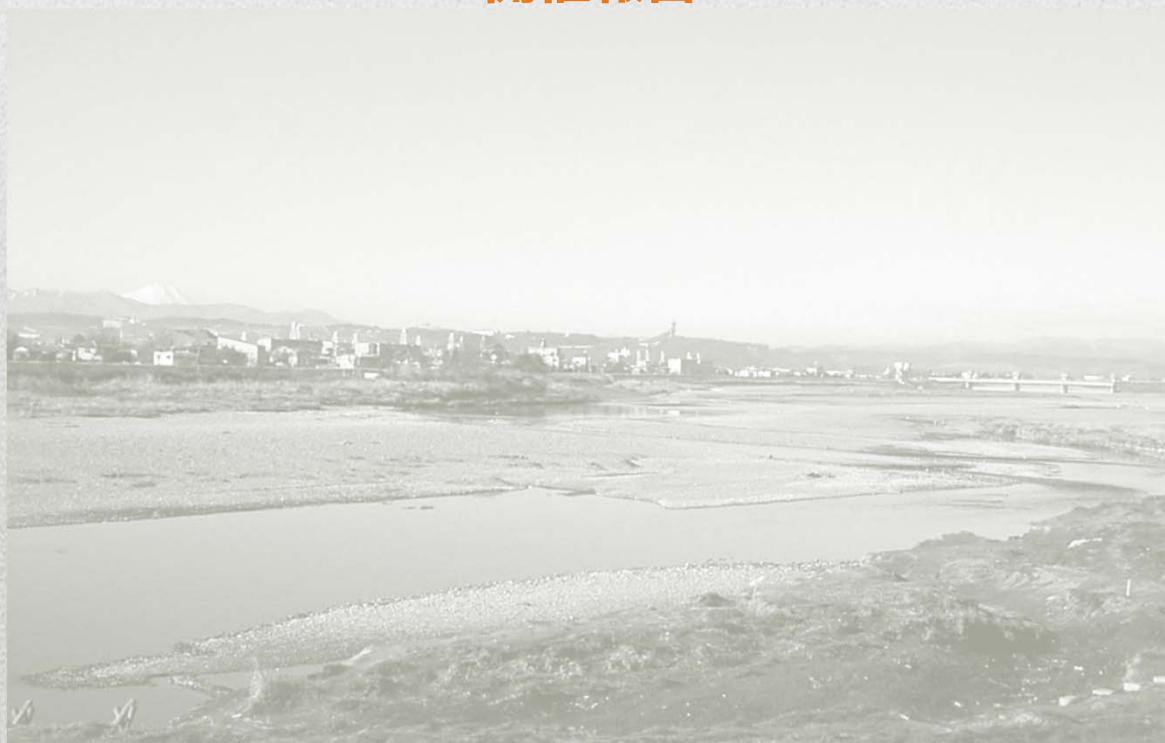


第6回多摩川流域歴史セミナー

## 『調布玉川惣画図に見る多摩川の名所』

～午後の部：講演 岩橋 清美 氏～

### － 開催報告 －



『多摩川50景』 染地の多摩川

平成30年1月28日（日）  
多摩川流域懇談会

## ■調布玉川惣画図とは？

今日は「調布玉川惣画図」という川絵図を皆さんにご覧いただき、多摩地域、多摩川流域の名所を紹介しながら、この絵が意味するところを読み解いていきたいと思ひます。

最初に、「調布玉川惣画図」について説明します。作成者は、関戸村という現在の多摩市関戸に位置する村の名主を務めていた相澤伴主あいざわともぬしという人物です。この絵図は浄書と言って、伴主が描いた大体のデザインを長谷川雪堤はせがわせつゐという絵師がまとめあげました。雪堤は「江戸名所図絵」をはじめ、江戸で刊行されてた多くの名所図絵の挿絵を描く絵師として、当時、非常に人気の高い人でした。この長谷川雪堤に浄書を依頼しているところがこの絵図の特徴だと思ひます。そのため、「江戸名所図絵」と比較すると、似ているところがあります。

この絵図は、卷子本かんすになっていて、幅が約 30cm、長さが約 13m35cm あります。所蔵先には、国会図書館、国立公文書館、東京都公文書館、多摩市教育委員会、町田の小島資料館、青梅市郷土資料館などがあります。これらの写本を比べると、多摩市教育委員会が持っているもの以外には色がついていません。

おそらく出版された当時は、木版で刷った墨線に、多摩川の部分だけに青く色をつけていたと思われます。

では誰が彩色したのかという疑問が生じますが、この点については、相澤伴主自身が 1 本だけに色を塗ったのではないかと考えられていますが、確証はありません。

## ■相澤家と関戸村

### (1) 関戸村

最初に、この絵図をつくった相澤家とはどのような家だったのか、また、相澤家の人々が住んでいた関戸村とはどのような村だったのかをお話しします。

関戸村は、多摩川の中流域に位置する村です。中世においては、鎌倉街道の宿駅であり、交通の要衝でした。しかし同村は天正 18 年（1590）、戦国大名北条氏の遺臣山角氏の知行地となり、その後、正保年間に幕府領が設定され二給支配となりました。村高は『武蔵田園簿』では約 300 石余、『元禄郷帳』では約 210 石余、『天保郷帳』では約 280 石余と推移しています。元禄期に村高が減少しているのは、多摩川・大栗川沿いに田地が集中していたため、水害を受けやすかったことに起因していたのでしょうか。

### (2) 相澤家

相澤家は幕府領の名主をつとめ、多くの林畑（農業用の土地ではなく、木を植えている土地）を持っていました。主な仕事は農業ですが、日野領の筏師仲間として、杉や槻などの材木や薪炭の売買に携わっており、これによって経済的成長をとげていったのです。

相澤家は、古くからこの地域に住んでいましたが、同地域にはそもそも有山という家があり、中世においては、有山家が中心的な役割を果たしていました。有山家は北条氏ともつながりがあり、そのことを示す古文書を多数所持していたのですが、非常に残念なことに、近世の初期に没落してしまいました。その後、近世的村落が確立していくなかで、江戸地廻り経済の進展ともあいまって成長を遂げたのが相澤家であり、ついには名主をつとめるに至ったのです。その過程で相澤家は、有山家が持っていた古い文書を継承したのです。

この有山家の古文書というのは大変注目されていて、江戸の文人たちが一度は見てみたいと思ふような古物でした。このような地域の古物を引き継ぐということは非常に重要なことで、それを引き継ぐことで、相澤家は地域における正統なリーダーとなりえるわけです。



### ■絵師 相澤五流

『調布玉川惣画図』をつくった伴主の父は五流という人物です。1746年から1822年にかけて生きていた人で通称を源左衛門といました。五流は父・了栄から家督を継いで名主を務めていましたが、50歳になったときに名主の仕事を伴主に譲り絵師として活動を始めました。

現在、多摩地域の寺社などで五流の絵を目にすることができます。多摩市教育委員会の調査では56点程が確認されており、神農図・雲龍図・大黒天図・恵比寿図等があります。五流は最初、一瓢斎という人物に絵を学び、その後、江戸幕府の御用絵師狩野周信に弟子入りし、多摩地域の在村絵師で初めて法眼の位を得ました。

19世紀に入ると村役人層を中心に村人の家屋のあり方も変わってきます。農村部の家作には制限もありましたが、縁付きの琉球表や早嶋表を用いた座敷が設えられるようになりました。こうした座敷には床の間があり、掛軸が掛けられていたと思われます。家屋の変化が五流の絵師としての活動を可能にしたのでしょう。

### ■允中流挿花創始者 相澤伴主



相澤伴主 自画像

相澤伴主は五流の息子で、1768年から1849年に

生きた人物です。伴主は「允中流」という挿花の創始者として知られている人です。通称は玄介（源助）、あるいは父親の名前をついで源左衛門といました。伴主は号で、挿花などの文化活動をするときに名乗っていたものです。彼は名主をつぐ前に江戸に遊学していました。このとき彼の心を捉えたのが「袁中郎流」（現在の「宏道流」という生け花だったので。しかし、父親である五流が隠居することになったため、やむなく関戸村に戻ります。村では江戸のような高価な花や花器を使うことはできなかつたため、農村に合ったスタイルの生け花、「允中流」を創始しました。彼の弟子の作品をまとめた「允中挿花鑑」を見ますと、身近な花を綺麗に見せる作品が多くあります。

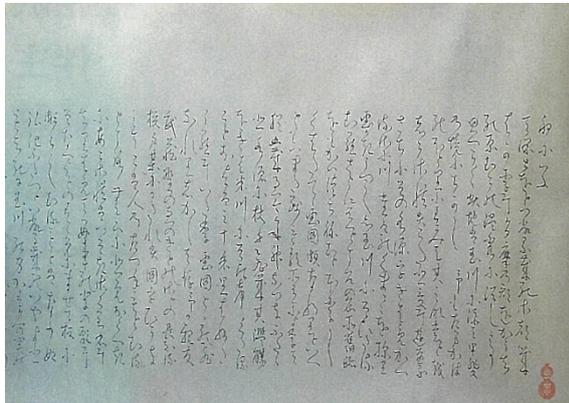
「允中流」の弟子は府中を中心に南多摩地域、青梅、神奈川県厚木まで広がっています。特に青梅には家族ぐるみの門人がいます。つまり、ご当主と奥様とのお子さんというふうな取り合わせです。奥さんとお子さんが弟子というのは、農村部では大変稀なことです。村社会では挿花だけではなく、俳諧や国学など文化活動の担い手の多くは男性でしたので、子どもや女性がいたことは注目すべき点だと思います。

当時の指導は出稽古でしたので、伴主は弟子の家を一軒ずつ回っていました。日野や町田などにも弟子が住んでいました。ちなみに、新撰組を支援していた小野路村（現町田市）名主小島鹿之助は允中流の高弟です。

伴主は、他にも蹴鞠や和歌を得意とし、造庭も手がけていました。彼の自画像をみますと、烏帽子をつけ、蹴鞠の鞠と華道の花鉢を自分の前に置いています。この村人らしからぬ雅な姿に文化人としての彼の意識を見ることができます。

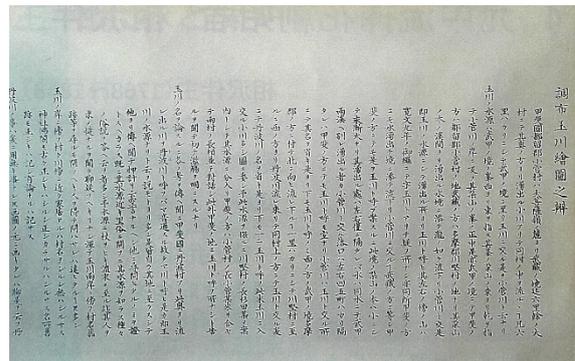


■『調布玉川惣画図』にみる名所



調布玉川惣画図 序文（平仮名）

『調布玉川惣画図』には冒頭に平仮名で書かれた序文があります。「初めにいふ」という書き出しで始まり、なぜ、『調布玉川惣画図』の製作を思い立ったのかが書かれています。これによりますと、あるとき、小河内温泉に逗留した際、多摩川の流れがどこから始まるのかを調べてみたいと思ひ立ち、杖をつきながら多摩川の上流から羽田浦に至るまでを歩いたというのです。伴主は歩きながら流域の名所や風景を写生し、それを絵図としてまとめたと綴っています。その後、この絵図を允中流の弟子で榎木新田（現国分寺市）名主榎戸源蔵に見せたところ、多くの人々に見て貰うべきだと出版を勧められました。『調布玉川惣画図』が刊行に至る過程の一端は柴崎村（現立川市）名主鈴木平九郎の「公私日記」からもわかります。これによると、榎戸源蔵が「伴主無尽」を主催し、允中流の弟子たちに呼びかけて出版費用を集めていました。



調布玉川絵図之弁

平仮名の序文の次には「調布玉川絵図之弁」という漢文調の文章が続きます。この「調布玉川絵図之弁」では、「調布玉川惣画図」に描かれた名所や寺社の説明が漢字・片仮名文で書かれています。仮名文の序文と漢字・片仮名文の名所の説明というのは、当時の知識人を意識した構成だと言えます。

この文章では玉川の水源に関する記述もあります。「玉川ノ水源ハ武甲ノ境ノ峯西ヨリ東ヲ指ス」と書いてありまして、「小菅村ノ地武蔵ノ方ハ多摩郡川堅村ノ地ナリ」とあり、『調布玉川惣画図』では小菅村部分に「玉川水源」という書き入れが見えます。ただし、玉川水源というのは、当時は諸説あつて、伴主の考え方とは違う人もいました。伴主はこうに書いていますが、実際には水源まで行ってはいないのではないかという説もあります。

また、「調布玉川絵図之弁」には、どのような基準で『調布玉川惣画図』に描く村や寺社・名所を決めたのかについても書かれています。「川傍ニ近く家居アルハ村名ヲシルシ」、「無シハシルサズ」と書いてあり、玉川流域の村であっても、川岸に民家がないところは描かなかったというのです。

神社仏閣については、「古ク正シキハシルシ、正シカラザルハシルサズ」と書いてあり、古く正しい由緒を持つと思われるものを描いたとあります。同様に名所・旧跡についても「正シキハ記シ、有論ナルハ記サズ」としており、伴主が一つ一つを考証し、由緒が明確であれば採用し、そうではないものは取り



上げなかったと書かれています。『調布玉川惣画図』はちょうど相沢家があった関戸のあたりに、向岡・横溝八郎の墓・玉川の里といった名所が集中しています。

『調布玉川惣画図』に描かれている村を拾い出すと、甲斐国都留郡小菅（こすげ）から始まって、丹波（たば）、鴨沢、武蔵国多摩郡に入り原、小河内、小丹波（こたば）、沢井、御嶽（みたけ）、二又尾（ふたまたお）、青梅、羽村（はむら）、草花（くさばな）、小川と西多摩地域の村々が続きます。それから中流域に入り、滝山（たきやま）、拝島をへて、日野、石田、高幡、百草（もぐさ）と日野市域の村々が続き、国立市域の谷保、多摩市域の一ノ宮、関戸、府中市域の本宿（ほんじゅく）、府中宿の名前が見えます。そして、多摩川は稲城市域の矢野口を通過して下流域に入り、二子、大師河原（だいしがわら）、稲荷新田（とうかしんでん）、矢口（やぐち）をへて江戸湾に流れ込みます。

なお、『調布玉川惣画図』には渡船場、平井川や秋川などの川も描かれています。多摩川との合流点に留意して描かれています。

名所を一覧表にすると一目瞭然ですが、名所は特定の箇所集中しています。特に、関戸村以降は名所が少なくなってきており、大師堂や六所明神、新田明神などが大きく表現されています。こういうところに何か伴主の恣意的なものがあるのではないのでしょうか。また、甲斐国の山の描き方や植生にも注目してみてください。

## (1) 小菅村



では最初の出発点、小菅村です。家が密集した山間の小さな村があります。注目するのは、山と雲の表現です。このモクモクとした雲と、切り立った山の感じが特徴的です。山梨の山は、長野で見えるような高原のなだらかな山ではありません。それを良く表しています。

## (2) 多摩川水源



ここは多摩川の水源地です。小菅のほうから流れている川と合流して、多摩川がここから始まります。甲斐と武蔵の国境の近くの山間に多摩川の水源地があるという理解です。切り立った山とそれを覆う雲の表現が面白いところです。



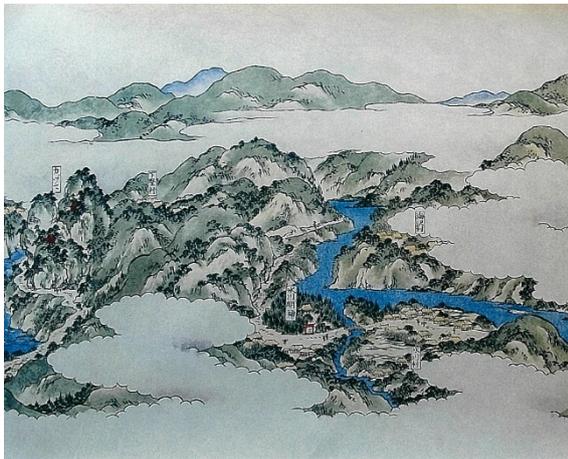
### (3) 小河内温泉



次のポイントは小河内温泉です。現在は小河内ダムになっています。二階建ての建物が見えますが、これが温泉宿です。旅人がいっぱい温泉宿のほうに向かって歩いています。

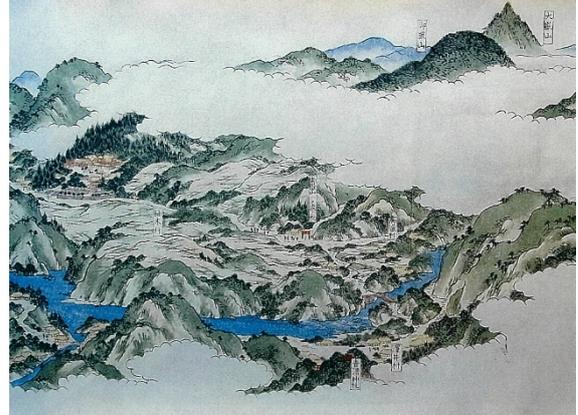
ここは、伴主が『調布玉川惣画図』をつくらうと決心した重要な場所です。同時に、小河内温泉は江戸近郊の観光地でもあったので、江戸の読者を意識して大きく描いていると思われます。

### (4) 氷川村・氷川明神



小河内温泉から少し下ってきますと、氷川明神や氷川村が見えます。この付近も険しい山が続きます。雲の表現が少し変化している点に注目してください。山道を人か馬が通っています。橋も見えています。このあたりの多摩川は川幅も狭く、起伏に富んでいますが、そこが上手く表現されていると思います。

### (5) 御嶽山



はるか向こうに御嶽山が見えます。手前には御嶽神社の一の鳥居があります。参詣者が歩いています。対岸には澤井村と青渭神社があり、その間に川が見えています。御嶽神社には国宝赤糸威鎧があります。この鎧は平安後期の鎧で畠山重忠が奉納したと伝えられているものです。この鎧は江戸時代から有名で、江戸幕府八代将軍徳川吉宗も上覧しました。この鎧のすばらしさに感服した吉宗は鎧の修復を命じるのですが、これが由緒となり、松平定信の『集古十種』にも掲載されました。そのため、江戸の文化人の関心を集めることにもなったのです。

『調布玉川惣画図』のなかで大きく描かれているところは、何らかの意識のあらわれだと思います。全体の中で、どこに力を入れて、どのように描いているかに目を向けると、伴主の歴史意識を読み解くことができるのではないのでしょうか。

伴主は、実によく地域の個性を表現しています。そして、その個性がある場所には必ず「允中流」の門人がいるところがポイントなのです。刊行資金を援助してくれた門人たちの居住地の名所は大きく描かれています。



(6) 万年橋

(8) 玉川上水



万年橋のあたりでまできると、青梅宿に近づいてきます。日影和田村・日向和田村が見えます。山間に村が点々と家がある様子が確認できます。



さらに下ると玉川上水です。ここに来ると川幅が広がり、雲の描き方も変わってきます。多摩川が中流域に入ったことがわかります。

(7) 青梅宿



いよいよ青梅宿に入ります。青梅街道の宿場として栄えた場所です。街道をはさんで両側に家が並んでおり、天秤棒を担いだ商人の姿もあり、賑わいが表現されています。土蔵のある二建ての家も見えます。

これは羽村の陣屋で、上水の管理のためにおかれた幕府の役所です。二本差しの人物は幕府の役人です。この辺に駕籠が見えますが、役人が乗っているのでしょうか。

用水堰のところ、2つ「だし」が出ているのですが、これは洪水対策です。蛇籠と牛柵といった護岸設備も見えています。ここから玉川上水が始まります。玉川上水は江戸の住民の水を確保するために開削されましたが、多摩地域の人たちにとっても重要で、玉川上水が完成したことによって村の開発が進みました。もちろん武蔵野新田地帯にも大きな影響を与えています。『調布玉川惣画図』の刊行を勧めた榎戸源蔵は、この玉川上水の管理役をつとめていました。玉川上水は幕府の権威のようにも感じますが、管理に関わる村人たちの意識や地域の発展などを象徴しているようにも思われます。



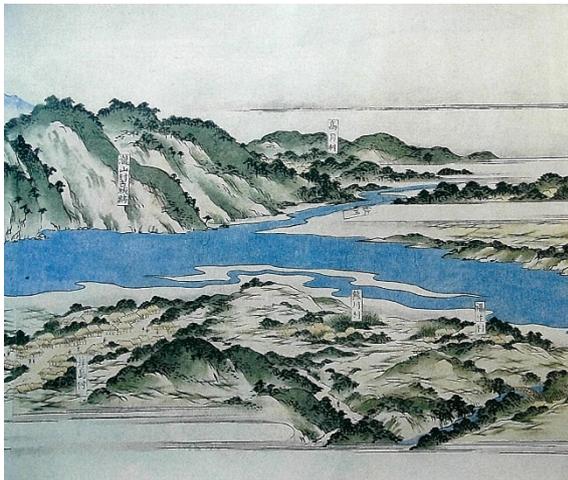
(9) 滝山城跡

遠くに青く描かれています。



この絵は滝山城跡のあたりです。戦国大名北条氏の城の一つです。伴主の門人には先祖が北条氏に仕えたという由緒を持つ者もいます。一般的に多摩地域には北条の由緒を持つ家というのがとても多く、それが一つの地域のアイデンティティーになっています。その他にも武田氏や今川氏など由緒を持っている家もあります。その意味で、滝山城跡は門人たちの家意識の象徴とも言えるのです。

(10) 多摩川と秋川の合流



さらに、ここから秋川が流れ込んできて多摩川に合流します。熊川、福生という青梅線の沿線の地名も見られます。拝島もあります。拝島は宿場として描かれています。村の中心に道があり両側に家が建ち並んでいます。拝島は、青梅・八王子と同様に市が立つ場所で、地域経済の拠点となっていました。この辺りから山の描き方が変わります。多摩丘陵が

(11) 平村周辺



ここは八王子市域で、栗須村と平村があります。対岸には宮沢村、築地村が見えています。平村が大きく描かれているところに注目してください。名主をつとめた平家は自邸内に東照宮を祀っていました。徳川家康が関東に入国した当初、道案内をつとめ、その褒美として銭を賜ったという由緒があります。同家では、この由緒によって東照宮を信仰していました。

(12) 日野宿



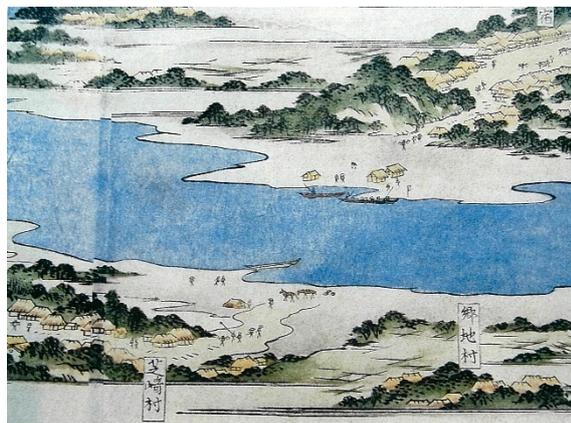
次は、いよいよ日野宿に入ります。甲州道中の宿



駅です。宿場の賑わいが描かれています。旅人たちが渡船場に向かっていきます。宿場の中心に神社が描かれています。この辺には土蔵がある家も見えます。

街道には、棒手振りや駕籠に乗った人がいます。駕籠に乗った人が川に向かっていきます。渡船が見えますが、『調布玉川惣画図』では、初めて船が出てくる場面です。近くには、船を待つ人々のために小屋があります。船には船頭のほかに4人ぐらい乗っています。

### (13) 日野の渡船場



日野の対岸が柴崎になります。対岸には船と馬が見えます。渡船場に向かって行く人がいます。柴崎村の名主鈴木平九郎、先ほどお話しをした「公私日記」を書いた人物です。日野宿組合村の大惣代をつとめていました。

### (14) 高幡不動と松蓮寺



だんだん『調布玉川惣画図』の中心に近づいてきました。浅川と多摩川の合流地点が描かれています。この付近は、多摩川の川幅の広く、大変ゆったり流れている感じに見えます。

日野側には高幡不動と松蓮寺（現在の百草園）があります。対岸には谷保天神社が見えています。青柳のあたりには、馬を引いて歩いていく村人がいます。

高幡不動のところを見ていただくと、平地がなく、山ばかりに見えます。高幡山金剛寺は『江戸名所図会』にもあり、江戸名所としても著名なところです。

しかし、ここはもう一つ意味があり、伴主や柴崎村の鈴木平九郎たちにとっては大事な場所でした。1827年（文政10年）に、江戸幕府は関東地域に改革組合村を編成します。これは50か村前後の村を領主の違いを超えて一つにし、関東取締出役のもとにおくというもので、幕末期の治安対策には大きく貢献しました。関戸村と柴崎村は日野宿組合に属していましたが、この組合村の寄合が高幡不動で行われていました。

松蓮寺は廃仏毀釈によって失われてしまいましたが、『調布玉川惣画図』を見ると、往事の様子がうかがわれます。松蓮寺の歴史も近年の調査によって明らかになりつつあります。

### (15) 関戸村周辺



ここは、『調布玉川惣画図』の中心です。関戸村をご覧下さい。伴主が住んでいる関戸村は、先ほど見



た青梅宿や日野宿と同じように人通りの多い宿場として描かれています。中世において矢倉沢往還の宿駅だったという意識の反映のように思われます。村から続く道は渡船場に向かっていきます。この渡船場は、日野の渡船場より広く、船も大きく描かれています。また、村内には河岸場も見えます。



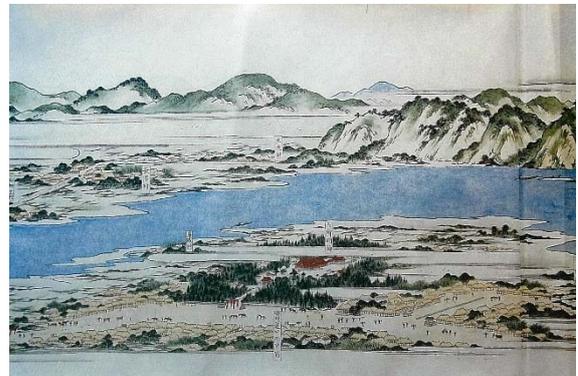
このあたりは関戸合戦に関する遺跡が多くあります。鎌倉幕府軍が新田義貞率いる軍勢に敗北し、鎌倉へ帰る途中、関戸周辺で凄惨な合戦がありました。この関戸合戦で討ち死にした人物に横溝八郎や安保入道があり、横溝八郎の墓は『調布玉川惣画図』のなかにも描かれています。

実は『調布玉川惣画図』をつくる前に、相澤家は「関戸旧記」という関戸地域の歴史をまとめた書物を編纂しています。編纂にあたっては、有山家から継承した中世の古文書や『吾妻鏡』や、『曾我物語』・『太平記』などが利用されています。「関戸旧記」は関戸村が鎌倉幕府滅亡という歴史的イベントの舞台になったという、彼の歴史意識が反映された書物ですが、こうした意識が『調布玉川惣画図』にもあらわれているのがわかります。

先ほど、この絵図の長さは 13m35cm 程あるといいましたが、関戸村は全体のほぼ中心に位置しています。さらに村の遠景に富士山があることに注目して下さい。富士山は、名所であることを示すモチーフで、江戸の名所絵などでは、必ずどこかに富士山が描かれています。まさに、富士山は、「ここが名所ですよ」という伴主の読者にむけたメッセージとも

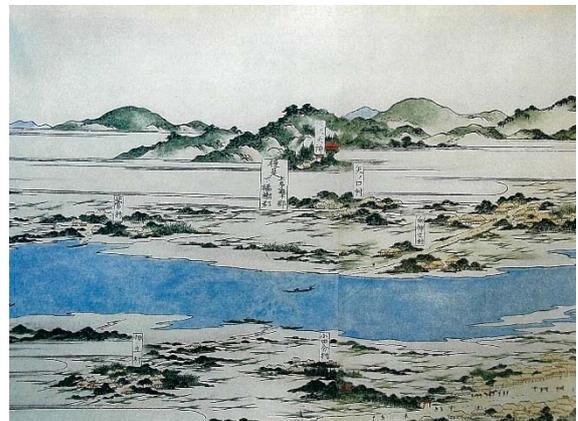
言えましょう。

## (16) 府中宿



甲州道中府中宿です。六所明神、現在の大國魂神社が大きく描かれています。鳥居や石垣、植生は現在とあまり変わらないようにも見えます。馬に荷物を積んで江戸に向う人々が多く、宿場の賑わいが感じられます。

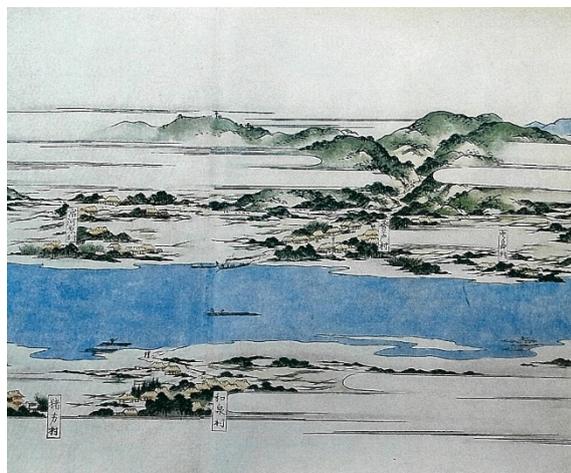
## (17) 押立村付近



押立村（現在の府中市）は武蔵野新田の開発に尽力した川崎平右衛門の出身村です。対岸に渡る船が見えます。

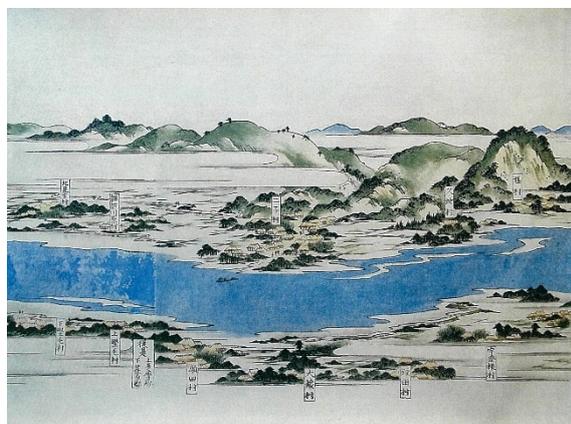


(18) 登戸村付近



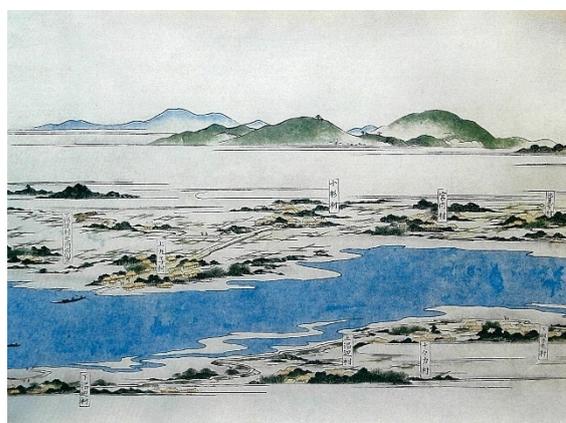
ここは今のJR線・小田急線の登戸駅のあたりです。渡し場があり、筏が大きく描かれています。登戸村には、かつて筏宿があり、筏の中継点でした。江戸では材木は建築資材として需要が高かったため、林業は多摩地域の主要産業の一つでした。

(19) 二子村付近



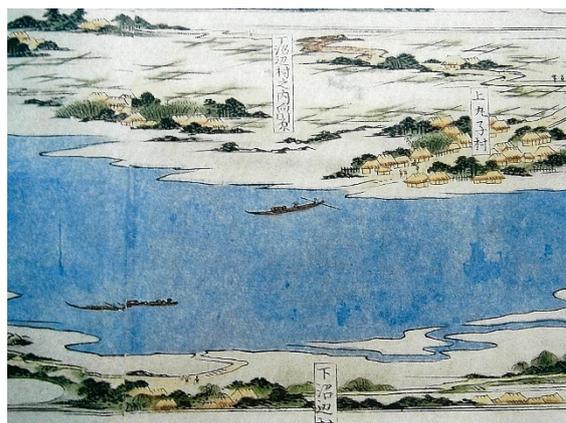
二子の渡しは、江戸から大山に向かう参詣の人たちが多摩川を渡る渡河点です。

(20) 小杉村付近



小杉村は近世初頭に将軍の宿泊所・休憩所となった御殿があったことで知られる場所です。

(21) 丸子の渡し



丸子の渡しも二子の渡しと同様に大山参詣の人々に利用された渡船場です。渡船場のある上丸子村は家数も多く宿場のようにも見えます。

(22) 新田明神・十騎明神





新田明神（現在の新田神社）は新田義貞の次男新田義興を祀った神社です。新田義興は父義貞の死後、観応の擾乱を期に挙兵し、一時は鎌倉を手中にするも足利尊氏の反撃にあい鎌倉を追われてしまいます。尊氏が亡くなると再度、鎌倉奪還をはかりますが、尊氏の子足利基氏（鎌倉公方）と畠山国清（関東管領）の命をうけた江戸遠江守らに矢口の渡りで謀殺されてしまいました。その後、江戸遠江守は狂死してしまうのですが、これが義興の怨霊によるものとの噂がたち、村人たちが義興の霊を慰めるために新田明神を建てたと言われています。十騎明神（現在の十寄神社）は義興の従者を祀った神社です。新田義興の謀殺は『太平記』の名場面であり、「神霊矢口渡」として人形浄瑠璃や歌舞伎の演目として江戸庶民にもよく知られていました。関戸合戦の史跡と同様に、多摩地域の人々の『太平記』の受容がうかがわれるところです。

### (23) 川崎宿付近



東海道川崎宿です。甲州道中の宿場と比べると人馬の数が多く、賑わいが格段に異なっているのがわかります。多摩川を下ってきた筏が解体されている様子が描かれています。

川崎の宿が運営している六郷の渡しも見ることができます。この渡しでは馬を船に乗せて渡しています。

### (24) 川崎大師



大師河原村です。平間寺は、現在、川崎大師として知られる真言宗の寺院です。江戸時代も近郊名所として多くの参詣者を集めていました。

### (25) 羽田浦



多摩川の河口にたどり着きました。羽田浦です。多摩川が江戸湾（東京湾）に流れ込んでいます。最後の部分に「青山 山中蔵巻」と書いてありますが、これについては、現在のところ判明していません。



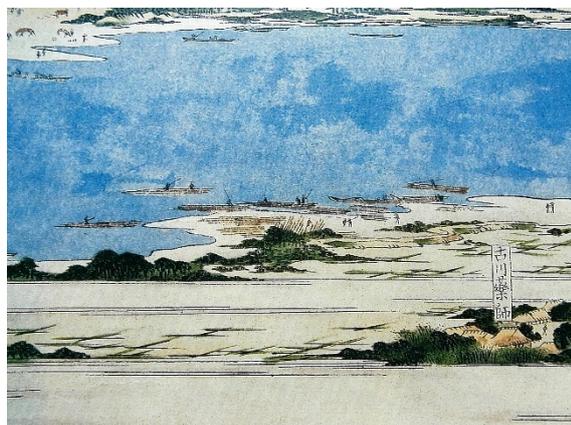
## ■人々の暮らし



『調布玉川惣画図』は多摩川沿岸の景観を描いているだけのように見えますが、地域の生業が随所に見受けられます。上流のほうでは水車が確認できます。



関戸の付近には、鶺鴒が描かれています。これは「徒歩鶺」(かちう)といって、村人が川の中に入り、紐をつけた鶺を操りながら漁をするものです。



流域の所々で筏が見られます。先ほど述べたよう

に、登戸付近では多くの筏が停泊していますし、川崎宿付近では筏が解体されている様子が描かれています。多摩川の流れは起伏に富み、しかも推進が浅いため、物流には向かない河川でもあります。しかし、江戸への材木の運搬には多摩川が利用され多くの筏が行き来していたのです。川崎宿のあたりまで来ると川の流れが緩やかになり、筏を進めるのが難しくなるのでしょうか。この付近で筏を解体していることから、ここからは運送手段が変わるのかもしれない。



## ■おわりに

今日は、『調布玉川惣画図』を見ながら江戸時代の多摩の名所を紹介しました。この絵図は、相沢伴主の「関戸旧記」の視覚化であり、多摩地域の人々の歴史意識の反映でもあります。「関戸旧記」は文章であり、この世界観を共有する範囲は限られてしまうかもしれません。しかし、江戸人気絵師長谷川雪堤の浄書による絵図であれば、読者は大きく広がり、伴主の歴史意識を広く江戸の文人たちにもアピールすることになったと言えます。出版という19世紀的な情報のあり方が地域の歴史意識にも影響を与えていたのです。

以上で終わります。ご静聴ありがとうございました。

■はじめに

【神谷】 コメンテーターのお二方それぞれ、岩橋先生のお話を伺ってのご意見はありますか。

【金子】 岩橋先生とは仕事で話すことが結構あります。今日初めて先生のお話を聞いて面白いと思ったのが、八王子に関する滝山城と平村のところですか。滝山城とは八王子にあるお城で、平村とは八王子のあたりで平の渡しがあった村です。私は4～5年前に、どのような渡しかと思い八王子側と対岸の昭島側からこの沿いを歩きました。渡し場のところには、八王子市側は何も書かれていない一方で、対岸の昭島側には説明板に「平の渡しがあった」と書かれていました。今は堰になっており、船が渡るようなところはありませぬ。ただ、市販の昭文社の八王子市という地図には、ちょうどこの平の多摩川のところで都道が途切れ、反対側に都道の跡がありました。これから考えると、ここにはやはり渡しがあり、道路上はつながっているのかなと、ふとそんなことを思いながら先生のお話を聞かせていただきました。

【小野】 相澤の郷土意識、歴史意識、世界観を分析しながらの地図の読み解き、大変おもしろかったです。私なりに解釈し直せばこれは、「江戸名所図絵」に代表されるような江戸を中心とした景観意識を、多摩を中心にして見直した絵図であると思います。相澤自身は、玉川の源流を探ると言いつつ、実際には多摩の歴史の源流を探った絵ではないかと思いました。「江戸名所図絵」では一番西側が日野あたりと思いますが、ここではずっと奥多摩のほうまで遡っており、視野の広がりがあったと思います。

絵図の中で相澤が主張したかったことの一つとして、歌枕のような名所は、例えば霞ノ関と言った場合には今の官庁街の千代田区の霞が関という説もありましたが、それをあえて自分の故郷である関戸の霞ノ関と大きく主張したかったと思います。

そのような意味で、江戸との対抗関係があります。発表の中で岩橋先生は、青梅宿の金剛寺に碑(いしぶみ)があると指摘していました。私も今日初めて気が

つきましたが、金剛寺の碑はちょうど後ろにある梅の木を表示ではないかと思います。青梅の金剛寺には「将門お手植えの梅」という青い梅が今でもあり、今の青梅市の名前の由来になった木と言われている。江戸の中心にある平将門を祀った神田明神に対抗し、青梅にも将門があるということをあえて主張したのかなと思った次第です。いずれにしても、この「調布玉川惣画図」というのは、江戸中心の世界観を的確な郷土意識の中で描き直したものであることを改めて感じたところです。

■質疑応答：名称について

【参加者】『調布玉川惣画図』の調布というのは何のことでしょうか。

【岩橋】 調布という地名は色々な場所で残っています。元々は、古代律令制のときに「租・庸・調」という税制があり、その中で地域の特産物を納める税として「調」がありました。諸説ありますが、この調を当該地域では布で収めていました。そこから調布という名称が生まれたと言われています。その調布を入れて『調布玉川惣画図』という名称になったと思います。

【参加者】「玉川」と「多摩川」の違いは何ですか。

【小野】 どちらが古いかで考えますと、  
わみょうるいじゅうしやう  
 「和名類聚抄」の中で最初に多磨郡というのが出てきており、「多磨」と書きます。その後から「玉」という字が出てきて、多磨郡の多磨が先か、玉川の玉が先かという問題になります。「多磨」という字は、多摩川の他には全国的に全くない川の名前ですが、「玉川」と書く川は他にもあります。古くは「出雲国風土記」の中にも玉川が出てきますので、多分、玉川というのは割と川につけやすい名前ではないかと思います。その後で、多磨川が流れているということで多磨郡という地名ができたと思いますので、順番から言うと、「玉」から「多摩川」であると私は思います。



## ■質疑応答：絵図について

【参加者】5-3 小河内温泉では玉川が上下に分かれています。小菅川が分流している地点を示している図ですか。

【岩橋】確かにそうですね。

【神谷】絵図の中に「丹波川」と描いてありますね。5-2のところは明らかに下が丹波川で、上が玉川と小菅川です。それが小河内温泉のところに描いてあるのが5-3ですが、合流しているところのようにも見えますし、絵がよくわかりません。絵図全体で見たほうがわかりやすいのかもしれないですね。

【岩橋】もう少し調べてみようと思います。

【参加者】絵図中の緑の部分では植生が描き分けられていると説明がありましたが、川辺付近の植林について、どのような特徴の樹木とわかるのでしょうか。また、上流・中流・下流の違い等がありますか。

【岩橋】木々の描き方が異なることは分かりますが、樹木の種類を見分けるのは難しいですね。現在の山とは状況が異なっていると思いますが、描いている樹木がわかると面白いと思います。

【神谷】この絵図から植生を読み取り、当時の玉川の植生を研究するというのとは一つの研究課題だと思います。相澤伴主は生け花の先生ですから、植物のことは十分承知で、いかげんには描けなかったのではないのでしょうか。そのため、ある程度描き分けられているはずだと思います。専門の方と共同研究してみたら面白いと思いますね。

【岩橋】「八王子市史」を編集していたときに知りましたが、幕府の指示で植える樹木が変わることがあり、それが山の植生にも影響を及ぼしているようです。多摩地域には代官江川氏の支配所がありますが、江川氏は建築資材になる樹木の植え付けを奨励しています。『調布玉川惣画図』に描かれた植生は19世紀初頭頃と思われる。色々分析してみる余地があると思います。

【小野】府中の六所明神の木は岩橋先生ご指摘のとおり杉です。同じ絵師による「江戸名所図絵」の六

所明神の境内絵図を見ますと、もっときっちり描かれており、杉と桜と樅の木を分けて描いています。奥に拝殿がありますが、その少し手前に2本、両側に樅の木があります。この神主の若衆の名前が「樅(もみ)の雫(しずく)」になっているほど象徴的な木ですが、この絵図でもそれをきちんと描いています。他は明らかに杉、針葉樹になっています。

もう一つ気がついたのは河口のほうです。葦をきちんと描いてありました。平安時代の「更級日記」や、もっと遡って「万葉集」の防人歌の中にも橘郡の人が葦のことを詠んでいますように、古代以来の葦原の残影がきちんと描かれていると感じました。

【参加者】『調布玉川惣画図』の河岸は関戸河岸のみですが、多摩川における近世の河岸の存在はいかなのでしょうか。

【岩橋】村明細帳などを見てみると、河岸と言えるかどうかわかりませんが、年貢の津出<sup>つだし</sup>をやっているところが各所で出てきます。多摩川は水深が浅いので水運には向かないと言われますが、年貢米の輸送には使われていたようです。こうしたことは村明細帳の記述に見られますので、河岸があったと考えられます。

【金子】先ほど絵が出ていますが、このあたりの滝山城という城の山頂に金比羅山があったと思います。金比羅山はたしか航海の神様で、滝山城から下がり川になっていますので、おそらく何らかの航海の安全を願うものがあったのではないかなと、職場で他の職員と話をしたことがあります。

【岩橋】栗ノ須村の古文書には、周辺村々との筏の争論が多く残っています。多くの筏が一斉に多摩川を下っていく際に、用水路の樋や橋の一部を破壊してしまい、その補償などをめぐってしばしば訴訟がおきています。

【神谷】筏については、おそらく最源流部から持ち出し、筏に組んで、ばらしてという流域全体にわたる木材流通の流れです。そういう観点で、また一つ別に見ていく機会ができたと思います。



そういう意味では、河川勾配の基本的な条件によるところが大きいので、おそらく関戸、府中あたりのところまでは船が来られるということだと思います。もう一つ勾配が大きく変わるのは二子玉のところですね。二子玉と言うと地元の人に怒られてしまう、二子玉川のところですね。そのようなことも川の性質と生活とが絡んでいるのだらうと思います。

**【参加者】** 5-5 御嶽山の図の左の立派な建物は、現代ではどのあたりでしょうか、吉野梅郷のあたりでしょうか。

**【岩橋】** これはとても大きな建物ですね。寺院のようにも見えますね。

**【小野】** 一の鳥居とありますが、人の動きから見ると、参道はその右ではなくて左ですね。参道は、大きな屋敷のところに行って、そこから雲に隠れながら上へ行くのだと思います。そうすると、<sup>おしのやかた</sup>御師館ではないですか。

**【岩橋】** 山下御師の家でしょうか。

**【小野】** そうですね。この絵だとデフォルメされていて、参道がちょっとくねくねしていたり、山と下が離れ過ぎていますが、参道のルートから言うと、一の鳥居を潜って、それから御師館となります。もしかしたら、相澤が御嶽講を組む中でお世話になった家をひときわ大きく描いたのかもしれない。

**【岩橋】** それは、ありそうなことですね。山下御師の家かもしれないです。

**【参加者】** 谷保天満宮は昔、南側が入り口と聞いていました。多摩川の伝統として、北側から入るのが普通ではないでしょうか。

**【小野】** 甲州街道に面したところに鳥居がありますね。向かって南へ行き、社殿は東を向いています。今でもそうですが、鳥居は甲州街道に面してありますが、参道を真っ直ぐ行くと、向かって右側に折れて参拝する形になりますので、これは明らかに近世に甲州街道が作られてからの配置になっているわけです。もとは東を向いていたということで、国府の

ほう、府中のほうを向いているということだと思います。

もう一つ、谷保天満宮が移転したという伝承があります。最初、天満宮がつくられたのは、今、天神島という字名が残っているもう少し東のほうの川に近いところですね。そこから移転してきて、まず東向きにおさまり、その後、甲州街道がつくられて北側になりました。最初は、今の画面の一番左のほうに谷保天満宮が創建されたと言われていました。その後、今の場所に移転したのが鎌倉時代のころだったと思いますが、そのときに東向きになりました。その後、甲州街道がつくられ、甲州街道の変遷にしたがって、今のように少し変則的な境内のレイアウトになったと思います。

**【神谷】** 大國魂神社自体が古代、南を向いていたという話とは関係ないですか。

**【小野】** それも確かにありますね。大國魂神社は北を向いており、谷保天満宮は東を向いています。それぞれ元は南向きだった可能性は否定できません。というのも、六所宮の一つである府中の大國魂神社については、中世に遡る書物で「源威集」という本の中で記載があります。永承6年だったか11世紀に、元は南向きだった社殿を、源頼義がこれから戦争に行く奥州を守護するために北向きに変えたという伝承がありますので、同じように谷保天満宮も普通神社の形として南向きである可能性はあったと思います。

**【参加者】** 矢倉沢往還も、そこに至る全ての道の一般名なのでしょうか。

**【金子】** 矢倉沢往還というと国道246号線、江戸から出まして二子の渡しを渡って、大山のほうへ向かう東海道の裏街道というイメージを持っていました。けれど、関戸のほうにも行くのが矢倉沢往還であると岩橋先生が仰っていて、矢倉沢往還という言い方は幾つかあるのかと私も伺いました。矢倉沢往還は、たしか足柄のほうへ向かう道をそう呼んだと聞いていますが、この絵を描いた方が矢倉沢往還と言っていたのと、江戸の人たちが認識していたのとはどう



も違うのかなということ、さっき岩橋先生とお話ししました。

**【参加者】** 8世紀ごろの武蔵国府設置にかかわる玉川の流れを利用した津（港）の跡らしきものは確認できないのでしょうか。

**【小野】** 5－16番の府中宿、真ん中に大國魂神社、六所神社がありますが、そのちょうど「六所」と書いてある後ろのあたり、崖の下ですね。崖際のところに最近、<sup>こくしのたち</sup>国司館の跡と、それに重なるように徳川の御殿の跡が見つかりました。また、そのちょうど下のところで、発掘調査で運河状の遺構が出たことが報告されています。この遺構は自然水路を少し拡幅した形での運河と見られ、多摩川から入っていると推定できるようなので、もし多摩川の水運ということがあれば、そこから船が入ってこられる形になっていた可能性はあると思います。

**【参加者】** 小菅から羽田まで多摩川はとても長いですが、渡船ではなく上流から下流へなど、船便のような交通または往来はなかったのでしょうか

**【岩橋】** 下流から上流までずっと船で行けるといようなことはなかったようです。

**【神谷】** 筏師は青梅あたりから下流までですか。

**【岩橋】** 登戸のあたりに行くと、筏道があると言われてます。『多摩川誌』によれば、筏師たちは地域毎にいくつかの集団に分かれているようです。この点についても今後調べていきたいと思います。



### 岩橋 清美 氏 プロフィール



- ・国文学研究資料館 古典籍共同研究事業センター 特任准教授
- ・法政大学大学院 人文科学研究科 博士課程修了
- ・博士（史学）

専門は日本近世史の地域史・文化史で、江戸時代における地誌や歴史書の編纂について研究している。著書に『近世日本の歴史意識と情報空間』（名著出版、2010年）、『明治維新と歴史意識』（吉川弘文館、2005年）等がある。

#### 【講演者挨拶】

私の専門は日本近世史で、主として文化史を研究しています。現在は国文学研究資料館に勤務し、国立極地研究所や国立天文台の研究者の方々と歴史的オーロラについて調べています。江戸時代には、この多摩地域でもオーロラが見えていました。古文書を通して江戸時代の人々が天変地異をどのように感じていたかを考えています。



#### 総司会・開会挨拶：神谷 博 氏（多摩川流域懇談会運営委員長）

多摩川流域歴史セミナーは古代、中近世、近現代というふうな3つのタームで3回ずつぐらい、上・中・下流を回っていくような計画でスタートしました。今回のセミナーは中世第3回目の講演です。今後は近世から現代に入っていくということを予定しています。

今日は「調布玉川惣画図」を全流域に展開したお話となりますが、多摩川の歴史と、水と人々の生活を見ていこうという趣旨です。いろいろな歴史の講座はあるかと思いますが、この歴史セミナーにおいては、そのような多摩川との関係でお聞きいただければよろしいかと思います。



#### まとめ：金子 征史 氏（八王子市）

行政の人間として文化財の仕事をしている中で、あまり川という視点から物を見たことがなかったのので、今日は大変新鮮な気持ちでお話を聞かせていただきました。

何年か前に浅川橋というところで化石が出ました。私が発掘調査を担当したのですが、大騒ぎになり京浜河川事務所さんにご協力をいただいたことを思い出しながら今日一日過ごさせていただきました。



#### まとめ：小野 一之 氏（府中郷土の森博物館 館長）

なぜ多摩川を視点にこういった絵がつくれるのか、歴史を遡るためになぜ川なのか、川の名所というのはなぜ出来るのかといった意味で、大変興味深いお話を先生から伺いました。川の役割というものを改めて考えてみたいです。川とは、源流・歴史を遡る一つのツールかなと思います。

川とは下るものではなく遡るものだ、ということを感じました。河川事務所さんが「河口から〇km」という表示を多摩川につくっておりますが、なぜ源流からではなく河口から数えるのかと思っていました。今日の話聞き、やはり川というのは遡るものなのかと思ったところです。



#### 閉会挨拶：国頭 正信 氏（国土交通省京浜河川事務所 総括地域防災調整官）

京浜河川事務所は、多摩川、鶴見川、相模川、湘南海岸と沖ノ島島を管理している事務所です。私は河川管理事務所の所属なので、「青梅から上に橋がかかっているのは流れが速く船が行き来できないから」、「その下は川幅が広く流れが緩くなっているため渡しになっている」というように見えていたのですが、その途中には生活感や河岸のようにいろいろなものがあると実感しました。今度川を歩くときにはそれらを頭に入れ、この場所はここの特徴を描かれていたんだと考えながら、また一つ多摩川を好きになりたいと思っております。

## 『多摩川流域歴史セミナー』

「多摩川流域歴史セミナー」は多摩川と人間の関わりの歴史を掘り起こし、「多摩川らしさ」としての地域文化を再発見することを目的として、先史・古代、中世・近世、近現代と年代を追いながら、多摩川流域の博物館、歴史館等を会場として、地域に即したテーマで随時公開セミナーを開催していきます。

### 第6回多摩川流域歴史セミナー『調布玉川惣画図に見る多摩川の名所』開催報告

作成 多摩川流域懇談会



- 多摩川流域懇談会は、多摩川にまつわる歴史文化を総合的に研究し、その成果をわかりやすく多摩川で活動する人が利用し、多摩川をより深く知ることができるよう、取組みの幅を広げ、活動を行っています。
- 多摩川流域歴史セミナーに関する情報は京浜河川事務所ホームページをご参照ください。

URL: [http://www.ktr.mlit.go.jp/keihin/keihin\\_index116.html](http://www.ktr.mlit.go.jp/keihin/keihin_index116.html)

